

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊
平成二十五年十一月一日発行
第四十六巻第十一号

ホトトギス

十一月号



俳句随想 〔三百七十七〕

汀子

美しい声で鳴く河鹿という季題がある。その河鹿を呼び寄せるための笛を河鹿笛と言うが、河鹿の鳴き声を河鹿笛と使う人がいる。それは間違っている。鶯笛も鶯の鳴き声のことではないが、使い方は間違えないようにしたい。日本語は使っているうちに間違って使うと、やがてそれらが許容範囲になってしまつて後の人達がそれらを正しいと思つて堂々と使い伝えて行くことになる。必ず間違いは正して使い伝えて行くようにしてほしい。

若い人達の間で俳句を横書きにしている人がいる。俳句は必ず縦書きにして欲しい。もしかしたら、パソコンやコンピュータで清書するために横書きなのかも知れないが、日本語は、特に俳句、短歌は縦に書いて頂きたい。「俳句甲子園」の選考委員長に迎えられて若者たちの俳句を選ぶことになつたが、これは全て横書きで、おまけに米粒ほどの字のために大変苦労して拝見した。先日、松山へ行き、そのことをしっかりと行って来たが、今後の若者たちの俳句が縦書きになるかどうかは分からない。

旬日記 汀子

平成二十四年十一月三日 関西ホトギス同人会

快晴を無駄に使ひて惜む秋
秋惜むには晴れ過ぎてをりしこと
集ひ来よこの秋晴に手を広げ
深秋の大橋渡りたくなりぬ
十一月四日 関西ホトギス俳句大会

明石の門やがて冬海荒るる日も
海を見てと鷹と分かりてより失せし
はつきりや鷹と分かりてより失せし
十一月五日 ロイヤル俳優

何事も早目に用意 初時雨
立冬の近し 天気は下り坂
ここよりは櫻落葉でありしこと
昨日会ひ 今日も教室初時雨
落葉かと思ひぬし雀飛び立ちぬ
立冬の朝の快晴約したる
落葉掃き清めたる庭とは淋し
十一月八日 清交社

朝の間の予定つなぎてゆく初冬
大綿の舞へば日和のつづかさる
稿債のふえゆくばかつ露寒し
まだ枯葉とは言ひ難き彩りも
初冬の落着く一と日賜りぬ
予定又増える電話の鳴る初冬
快晴に初冬の空をあづけたる
十一月九日 工業倶楽部

健康を得て 旅心抱く冬
ひそかにも葉隠れなりし茶の花よ
一年をふり返る冬なりしこと
華やきは心に納めゆける冬
甦りたる命とていとふ冬
十一月十一日 下朔句会

冬荒るる日と心して客を待つ
霜除の早々として間に合ひぬ
十一月十三日 大阪倶楽部

忽ちに氣断に乗りし鷹一羽
安心と油断に春の日の外出
凧に家居の至福ありにけり
冬紅葉その一劃を見つ小来し
仕上げねばならぬ稿債小六月
十一月十三日 絹業倶楽部

石路の花視界辿りてゆけば海
咲くまでは忘れてをりぬ石路の花
石路咲いて忘れたる色の加はりぬ
時雨忌といひて天気は下り坂
今の世をみそなはせとて芭蕉の忌
十一月十四日 『紅梅二十周年』

継続といふ小春日を抱く会
十一月十七日 中国ホトギス同人会
解けきらぬ初雪見つつ山路ゆく
初雪の大山岷峨と峰を置く
さつきまで雪の大山見えてみし
初雪の残る大山泊りかな
大山を覆ひ尽せし雪紅葉
日本海 覆ひ消して雪の霽
冬を越すくるつらへらさぎと逢ひて
なごり惜し初雪の大山あとに
わが旅路とも水鳥の越冬地
十一月十九日 アサヒカルチャー

初霜の来し 大山に旅名残
肌寒き朝快晴を約したる朝
大山の 旅はや遠し冬の朝
十一月二十日 有恒俳句会

朝の間の初霜消えて石畳
果てしなき空より降りてくる寒さ
掃き切るといふことのなき木の葉かな
木の葉舞ひ着地の音も逃がさずに
日の差せば黄葉に戻る木の葉かな
初霜のありしと告ぐる光かな
あるがまま木の葉自由となりけり
十一月二十日 無名会

初時雨通りすぎたること確か
散紅葉庭の春秋尽きざりし
紅葉にはなき明る色の散黄葉
初時雨は庭師休憩時 黄葉
水音の中 風音散黄葉
ひと巡り黄葉明りに染まりけり
たくましき消え庭芒枯れゆける
十一月二十一日 夏潮句会

炉開をせし山荘は人住まず
小春日や待合室の顔馴染み
小家に錠かけて出掛けし小六月
小春日の朝はじまつてをりにけり
勿体なき家居となりし小六月
山へ伸び海へ広がる街小春
この黄葉明りに尽きぬ狭庭かな
十一月二十二日 きささき句会

初霜や心鑑ひて旅立ちぬ
クリスマスリースのドアに托す留守
朝の雨止みて霜の春日取戻す
風さつと吹き初霜の消えて戻り
十一月二十四日 句会と講演の会
雨止んであしを確かめ毛皮着る
出してみても豹の毛皮を敷きて客
見逃せしことも茶の花葉隠れに
雨止みて茶の花日和持ち直す
質問を受けて立つべし小六月
十一月三十日 時雨句会

新海苔の香りさつと火にあぶる
上京のこたび一泊小六月
小六月崩るる雲の現れし
散るものは散り日だまりの返り花
新海苔として歯応へのありにけり
スケジュール明日に及びぬ小六月

散るものは散り日だまりの返り花
新海苔として歯応へのありにけり
スケジュール明日に及びぬ小六月

散るものは散り日だまりの返り花
新海苔として歯応へのありにけり
スケジュール明日に及びぬ小六月

散るものは散り日だまりの返り花
新海苔として歯応へのありにけり
スケジュール明日に及びぬ小六月

散るものは散り日だまりの返り花
新海苔として歯応へのありにけり
スケジュール明日に及びぬ小六月

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年十一月一日 蕉心会

そぞろ寒 太公望の孤独かな
やや寒く釣果答へてをりにけり
終の色放ちて萩の揺れ止まず
ねこじやらし道路の割れ目でふ命
秋の蚊やもうこの辺で逝きなはれ

十一月三、四日 関西ホトギス同人会 大会

新幹線切符売切れそぞろ寒
再会に秋思解けてゆきにけり
神の留守まさか車とちやふやるなり
うそ寒く古墳は昔語りをり
ウエディングドレス小春を纏ひつつ
大橋に立ち秋潮を踏んでをり

十一月五日 野分会音屋例会

木の葉髪一本にある歴史かな
その中の末社の誇り神の旅
木の葉髪もう諦めてある私
櫛に拉致されし百本木の葉髪
古事記千三百年や神の旅

十一月六日 刈谷市民俳句大会

摂津発ち三河時雨に降り立ちぬ
旅心三河にをさめ暮の秋
芋の秋佳人の視線浴びてをり
十一月七日 カトリック新聞選者吟

十一月八日 土筆会

天高し祈りの声を届けたく
華やぎの過去を捨て去り紅葉散る
淡々と日差しを浴びて冬耕す

神無月もうあなたとは会へないの
紅葉散る君の魂奪ひつつ
十一月八日 ひまわり俳壇選者吟

あらためて花鳥を友に去年今年
十一月十七日 岡山俳句会

名刀の冷たく光る刃先かな
寒灯に躍り出したる刃文かな
供華もなく刀匠の墓冬めける
鷹の目となりて刀匠鋼打つ

十一月十二日 朝日カルチャー若草句会

霜の声 鋼の声に刀打つ
神無月今日もビル街天目差す
旅続く冬めく鉄路乗り継ぎて
霜晴や昨夜の星屑纏ひつつ
朝霜を発ち夕星と存問す

十一月十三日 一円社一新俳句色紙揮毫

志 一 直 線 に 恵 方 道
十一月十五日 登高会
凧の鋭角にビル直角に
大根を洗ひ君との過去洗ふ
お見合ひは大根洗うてからのこと

十一月十七、十八日 中国ホトギス同人会 大会

冬霧の大山を消す疾やかな
冬霧に濡れてゆく人消えてゆく
駅で買ひ宿に失せた時雨傘
女将の名律さんといふ時雨宿
寒灯下虚子寛ぎしままの部屋
水鳥の絶滅危惧種守る水面
白鳥に空明け渡す午前九時

十一月二十日 草木瓜会

水鳥に水とらいで来りけり

山陰の空引き裂いて鷹一羽
ぬつと鷹現れて大山日和かな
鷹柱地球の自転促せり
指揮棒の先より冬の来りけり

十一月二十三日 伝統俳句協会関東支部茨城県支部会

点描画描きて鴨の浮寝かな
優美な名持ちて枯れゆく蓮かな
神の留守ここにもありぬ地震の痕
しぐるるや日本第二の湖染めて

十一月二十四日 ホトギス社句会

侘寂を秘めて茶の花日和かな
毛皮敷く今年も虎は弱かつた
金の蕊茶の花垣をはみ出せり
十一月二十五日 野分会東京例会
風を読むことに始まる神の旅
あなた誰鏡の中の木の葉髪

十一月二十七日 若水句会

木の葉髪君との過去を乗せて散る
冬めくや東京ドーム白々と
鷹の来て水面歪んでをりにけり
空絞る鷹近付いて来りけり

冬めくや水の分子にある主張
鷹の目の鋭さといふ気品かな
路地香る酢茎ぶぶ漬おぼんざい

十一月二十八日 目黒学園句会

目貼して浅間を指呼に虚子旧居
タラップを降りて神有月に立つ
隙間張る地震の傷痕癒えぬまま
目貼して大邸宅の離れかな

十一月二十八日 目黒学園句会

猫犬の阿吽虚ろに神無月

雑詠

廣太郎 選

風に日に雨待ち顔の七変化 東京 橋本くに彦
名園の三食つきの通し鴨 同
ひとところ空の落ち込む木下闇 同
滝音といふ快晴の山の音 奈良 古賀しぐれ
天辺も奈落も見えず滝涼し 同
滝壺は水を宥めてゐるところ 同
里山を闇に沈めて誘蛾灯 神戸 山田佳乃
百枚の代田漣繋げゆく 同
螢火を追うて会ひたき人のあり 同
山梔子の香りの中に沈む夜 龍ヶ崎 今橋眞理子
花樗咲いてやさしき幹となる 同
風薫るこれからといふ人生に 同
迎へたる邂逅の日や明易き 長岡 安原 葉
明易の一語に偲ぶ稽古会 同
海碧し空また青し花蜜柑 同 湯川 雅
梅天の底抜けさうに雲の垂る 香川
重心の揺れゐて高し立葵 同
己が声素直に聞いてゐる端居 同

メロン食ぶ紋章入りのカトラリー 東京 田丸千種
香霽散のために買ひおくオブラート 同
ローファーを素足に履いてパナマ帽 同
軽やかに風羽織りたる更衣 神戸 涌羅由美
水中花眠れぬ夜の聞き上手 同
ちよと傾げ日傘美人となりにけり 同
人間に真実空に花ざくろ 熊本 岩岡中正
日傘高く天上界を行くごとし 同
すつぽんの頸の太さよ青嵐 同
お遍路は祈り雀は交るなり 徳島 岩田公次
堰に身を打ちつけ鮎ののぼらんと 同
もの言へば薔薇のかをりの壊れさう 同
山梔子の咲く今日の白明日の白 袋井 湖東紀子
山梔子の花の浮きたる夕間暮 同
空梅雨の大地吹かるるばかりなり 同
万緑に俳諧の鬼ゐるは居るは 米子 中村襄介
梅雨蝶の晴れば土の湿り恋ふ 同
振り絞る慈悲心鳥の声ならん 同
衣更へて卒寿の世界一新す 福山 竹下陶子
心軽ければ言葉も更衣 同
爆撃の焦土の昔蟬時雨 同
餌漁る範圍青鷺首伸びて 八尾 山下美典
山霧に百合の匂ひの濡れてをり 同
沙羅の花世俗を絶てる白なりし 同

雑詠句評（十月号より）

一歩・純也・比奈夫
さい雪・しげ人・公次
仁義・佳乃・くに彦
雅・廣太郎

さりげなく祭にまぎれ一女優 東京 今井千鶴子

現在というか今では「雪まつり」のように記念、祝賀、宣伝など季節に関係なく「まつり」という言葉が使われているが、俳句という祭はまつること、即ち日本の神社の夏の祭祀、祭礼をいうのであった。宵祭から山車そして神輿の行列など年に一度の土地人にとって子供から大人まで最大な行事であった。そのように祭というのは我々にとってロマンでありノスタルジアでもある景の中に祭の群集の中に、今というテレビタレントではない作者にとつての映画や舞台で活躍していた一女優を見たのであった。特に目立つ化粧や服装をしていることなく群衆の中に作者にとつての初老の「一女優」を見つけ出したのである。祭という季節に「一女優」という下五は誠に見事な一語であるといえる。一読、夢がどんどんふくらんでくるようなといえる俳句である。（一歩）

よくテレビの取材等で女優がイベントと一緒に参加している事があるが、それも含めて、この句からは色々な場面が想像出来る。恐らく有名な女優なのであるが、この「祭」に参加している人達はひよっとして気付いていないのではないだろうか。日常と非日常が不思議にマッチしている。（廣太郎）

青芝の一本づつの雨の粒 眞面 井上浩一郎

青芝の一本ずつに、雨粒が宿っている。実にこまかいところを、発見して来た句である。が、そこに詩があるかどうか、発見に終わっていないか。素十の句を、秋桜子一派は「草の芽俳句」と軽蔑した。が、「甘草の芽のとびとびの一ならび」「朝顔の双葉のどこか濡れぬたる」のような素十の句は、草の芽の生命力を余すところなく把握し、宇宙の運行を、こんな些事で捉えている。この句がそこまで至っているかどうか。（純也）

例えば秋にはよく芝生一面に露が付いている事があり、風情のある景であるが、こちらは夏に雨粒が付いている景である。しかも「青芝」であるところがキーポイントだろう。青々とした鮮やかな色に付着している水滴が、濡れ色に輝いている。雨後の日差しも想像出来て、より美しい光を放っている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

引越してすぐ借り出され溝浚へ
 口ばかり出す一人ゐて溝浚へ
 一斉に出仕の僧の更衣
 通過して葵祭の日でありし
 緑蔭に来て緑蔭のかほとなる
 つどひては文学の緑蔭となる
 白魚の命の重さ揚げられし
 冴返るローマ教皇退位とや
 山荘に遺れる父の夏帽子
 父を待つやうに雷待つ信濃の夜
 見るだけで心足る富士山開
 先ほどの強がりどこにはたた神
 妻の星ならむ鹿に消えざるは
 虚子との世朧に我も老いけ心し
 伸び縮み黒き針列毛虫行く
 脳循環炭酸ガスと夏瘦と
 古事記にもその名残りて蛆虫よ
 鰻鮓を仕掛けし兄を尊敬す

神戸 三村純也
 同
 長岡 安原 葉
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 神戸 長山あや
 同
 八尾 米澤江都子
 同
 相模原 木村享史
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 東京 今井千鶴子
 同

衣更へて人品自づからなりし
 一村を地獄としたる出水かな
 心許されず涼みの茶事ながら
 涼やかに葉蓋に水の落さるる
 慈悲心鳥鬼の山にもしば鳴けり
 卯の花の果なく烟り大江山
 鰻めし慶事俗事と忙しく
 薫風や肩の荷下ろすことありて
 涼風の涼しいところ選び吹く
 暑いから涼しいことのありさうな
 夕焼や船場は子らの遊びの場
 一度だけ見し大阪の夕夕焼
 梅雨空の色を刻みしさざれ波
 囀の未完蜘蛛のあやとり進行中
 考ふること何もなき涼しさよ
 いつしかに樗の花の終りたる
 梅雨らしくなりゆくことに落ち着きぬ
 花合歓に試練の雨でありにけり

福山 竹下陶子
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 東京 河野美奇
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 神戸 後藤立夫
 同
 吹田 宮崎 正
 同
 東京 橋本くに彦
 同
 明石 中杉隆世
 同
 宝塚 水田むつみ
 同

い子選

天地有情句評

汀子

白魚の重量感。

山荘に遺れる父の夏帽子

神戸

長山あや

父恋。

引越してすぐ借り出され溝浚へ

神戸

三村純也

見るだけで心足る富士山開

八尾

米澤江都子

近所付き合いの第一歩。

精一杯生き抜かれた人生の終焉の一句。

一斉に出仕の僧の更衣

長岡

安原 葉

妻の星ならむ臍に消えざるは

相模原

木村享史

一度に夏めく霽囲気。

最愛の妻への鎮魂歌。

縁蔭に来て縁蔭のかほとなる

熊本

岩岡中正

脳循環炭酸ガスと夏瘦と

樺原

稲岡 長

ほっと一息つく表情。

熱中症と闘う医師の姿。

白魚の命の重さ揚げられし

東京

稲畑廣太郎

(以下略)